おじさんズ通信

２０２３年３月号（Ｎｏ２８）
発行元：登別市新生町４丁目緑風舎
発行者：おじさんズ３号
Web
http:www.ne.jp/asahi/takanet/mori/

日めくり帳・いち

７５歳の踏み絵か？

行って参りました、２月の下旬、近くの自動車教習所へ。７５歳の更新とあって３年前の高齢者講習に認知機能検査が加わり、行く前から多少ドキドキ。結果、どちらも合格証明書らしきものをもらってしまったから、もうこっちのもの……待てよ、警察署での最終関門が残っていました。

まあ、じい様の初体験です。終了後は外で言うな、とクギを刺されたわけでもないし、対策本も出ているので、後に続く方々のためにも、踏み絵の中身をチラッと、ばらしちゃおーっと。

16枚の絵、全部出てこない

まず、認知機能テストは４枚ずつ４回、計１６枚のイラストを見せられ、覚えます。その後、数字がびっしり並んだページの中から、言われた２つ、次に３つの数字を見つけ必死に斜線を引いていきます。

これがイラストの記憶を遠ざけるトラップだったと気づきましたが、後の祭りでした。そして、絵の回答欄に書き込めたのは半分程度。次のヒント付き救済ページでも、「やかん」の１個だけは忘れていて、（台所用品？　えーっと、えーっと）と煩悶しているうちにタイムアウトになりました。

残りは、話に聞いていた「きょうは何年、何月、何日、今の時刻を書きなさい」でした。

運転講習では、段差越えで「乗りあげ後のブレーキが遅いな」「停止位置、超えてるよ。これ違反」と、冷たくクラ～イ声が横から…。

同様に運転を続けていこうとしている皆さん、年寄り笑うな、いつか行く道、ですぞ。

日めくり帳・に

読みました「画学生」

先のおじさんズ通信１月号で紹介したウクライナの国民的詩人にして小説家、画家のタラス・シュエフチェンコ（１８１４年3月9日－１８６１年3月１０日）が、流刑中に書いた「画学生　残された未完のマドンナ」、手に入れました。地元の図書館を通じて、北見市の図書館から拝借したものですが。

返却まで２週間の猶予がありましたが、「習うより慣れろ」式の応用で「打って覚えて残す一石二鳥だ」と、全文、註、著者歴程、訳者あとがきを約１週間かけて、ワープロソフトに入力しました。

ウクライナの農奴少年物語

農奴だったウクライナのペンキ職人の少年が、ペテルブルグで絵の才能を見出され、絵描きたちや理解ある貴族らが２万５千ルーブルの金をねん出して少年に奴隷解放証を手渡す。

農奴のままであれば一生入ることのできない美術アカデミー、少年はその画学生となる。その後、彼を救い出した「私」は遠く離れたマチの大学教授となって去り、少年が「私」に送ってくる手紙の数々が、さまざまなドラマを生み出し展開していきます。

日本語訳にして８万２千字に及ぶ小説のあらすじを、ここで紹介するには無理があるのでこの辺にしますが、読み進むほど「この先、どうなる」と引き込まれていく作品です。まあ、タイトルからして結末は、明るいものではありませんが、シェフチェンコが冷徹に自身の半生を振り返り、書き上げたフィクションではないかと思います。

訳者が出版した理由は

訳者は遠小藤　哲（本名・遠藤哲男）１９２０年生まれ。東京外事専門学校露語科、ニコライ露語学院に学ぶ。日ソ協会苫小牧支部会員、住所は勇払郡早来町字遠浅、北海道ブロック工業（株）会長と奥付に略歴が載っていました。

もしかして、遠小藤（読みは「とこふじ」でしょうか）氏は、この小説もさることながら、ウクライナの農奴解放や反帝国主義を詩や小説を通して貫き、１０年の流刑生活にも耐えた人物を、多くの日本人に知ってもらいたいーと翻訳に情熱を注ぎ、自費出版したのではないか。原稿用紙にして５０枚近い「タラス・シェフチェンコ歴程」を読んで勝手に想像しました。

地元作家・かなまるよしあき氏が３５年前、室民に寄稿した「シェフチェンコ讃」と題する新聞の切り抜きが、１年前のロシア軍事侵攻を契機にウクライナ民

族の大ロシアに対する抵抗や自由独立を希求する歴史的バックボーンを浮かび上がらせた気がします。

生きていれば１０２歳になる訳者に、お尋ねしたいこと多々あり。この人の足跡をたどるのもアリかな、と日高路へのミニ旅を思いめぐらす春です。

日めくり帳・さん

孤島でシュプレヒコール

「ほら、どう？」と台所から運ばれてきた大根のシャッポ付き切り株。以前のような、観察記録をとるわけではありませんが、水をやり続けると、次々と葉っぱが出てきて、さながら南国の孤島のよう。

ならばと、切り株でアートよろしく、イラストと合体させて「孤島でシュプレヒコール」なる加工写真をつくってみました。

通信２４号の「北の湘南版・第三の男」に続く第２弾かな。ささやかながら、孤島ならぬ孤独の「戦争とめろ」コールも封書の隅っこなどで行使しております。

日めくり帳・よん

あの映画の公開年は？

創作に登場させる映画や歌の発表年はいつだったか、確認作業に気をつかいます。

あの頃、あの当時の話なのに、読んだ方から「この映画、日本で公開されたのはもっと後だったぞ」とか、「このヒット曲、まだ発売されていないはずだ」などとクレームが出ないように小心細々にチェックです。

いずれ、お目にとまるかもしれない創作のネタばらしというわけではありませんが、アメリカ映画「卒業」や、歌謡曲「小指の想い出」は、間違いなく、この話以前に公開、発表されていたか、何度か確かめます。

ちょっとした難儀は、不得意な西暦の和暦変換でして、（１９７２年は４５を引くと２７だから、２０に足すと昭和４７年だ！）なんて、ひと苦労。平成の話になると、パソコン画面に出した和暦変換表におすがりするしかありません。認知症テストで西暦２，０００年は平成何年か、なんて出たらお手上げです。

ちなみに、冬場のアレルギー性鼻炎でテッシュを手に取るたびに、つい頭のなかでうなってしまう「どうにも とまらない」（山本リンダ）がヒットしたのも１９７２年でした。昭和は遠くなりにけり…。

お礼と訂正

先月号でヒヨドリ到来の写真を見た読者から「あれはツグミのようです」との、ご指摘がありました。なるほど、よく見ると尾っぽも短いし、ピンポーンでした。お詫びじゃなくて、お礼をプラスして訂正とさせていただきます。

あらためて、ヒヨドリの写真を掲載しますが、庭の茶色柿の実はほとんど食べつくされ、今は落下した実をつついています。

それにしても、ほかにシジュウカラはやって来るものの、ツグミは初めての訪問かもしれません。

あとは、ドカ雪よ、さようなら、と願うばかりです。

薫風　烈風

▶「捏造文書だ」と言い張る、女性大臣。借りるトラの威がなくなったのをみて、官邸主導に恨みコツズイだった総務省の覆面部隊がいよいよ逆襲に出たのか。しかし攻める野党も二の矢、三の矢が乏しいというか、迫力不足だなあ～とは、元職場の同僚との藪にらみ時評。いつの時代も、権力者は目障り、耳障りなヤカラを、なんだ神田の明神様よろしく、罰したり、除外しようとするもの。こんな事書いてたら「首が飛ぶぞ」と恫喝される時代にしては、いけません。

▶先日、市内のさる幼稚園職員を対象に、登別まちライブラリーの活動を紹介した代表のＭさんから、「取材の取次に感謝」のメールが届きました。６月には地元で開かれる、高校の図書大会で講演することになったとか。時間が短いほど、講和は難しい。準備を怠りなく。

▶何十年か前まで囲んでいた麻雀卓。どの牌を捨てようか、悩み悩んで「どうすりゃいいの～さ、思案橋」と口ずさんだ「長崎ブルース」。３０号を目前に、そんな心境でして。まずは、皆さん、お元気で～。